

カントと affectio

キリスト教神学の伝統を補助線としたカントの受動性問題の解釈

勝西良典(藤女子大学)

本発表では、アウグスティヌスに代表される affectio の伝統との異同を明らかにしながら、触発や尊敬感情に代表される、カントにおける受動性の問題に対して一定の解釈を提示したい。

かつてフィヒテは、シェリングの書簡に応答する中で、自らの哲学とカントの哲学の違いを、Affection 理解の違いとして語ってみせた。例えば、フィヒテは、初期の道徳哲学において、意欲を意欲として成立させる強制の意識の種別化を通じて内的目的意識を抽出し、これに信を置いて自己の使命として受け入れることによって人間の道徳的本性を自己同定するという手法を採る。その結果、フィヒテは個別的自我を超えるものを内在的な原理と位置づけることができた。これに対し、カントの批判哲学では、経験的世界や現実の社会を出発点にしてそれらを可能にしている(ア・プリオリな)形式を明らかにすることを目指しており、経験的な事柄を超えるもの(物自体や絶対的なもの)について積極的に語る事が避けられる傾向にある。カントは、客観的構造物を可能にしている形式の分析の正当性を、そのように理解する主体の理解の方法と形式が等根源的であることの証明(例えば、演繹)によって示そうとしているのであり、こうしたカントの手法では、一見「外なるもの」ともみなされかねないような原理ないし、普通の意味では「外なるもの」と考えられてしかるべき原理が、実は「内なるもの」であったと語り返しにくいようにも思われる。

カントと自分の違いを、Affection 理解の違いとして見定めようとするフィヒテは、カント倫理学が心情倫理学でもあることを承知していた。しかしながら、対ヒューム戦略という点でも重要となる、道徳感情論の伝統に抗するというカントの姿勢は、思考を生きたままに解剖しようとするという意味でロックとは異なるかたちで認識の生理学を遂行しようとするフィヒテからすれば、心に刻印されたものを内的な原理として理論構築を推進しない腰の引けた考究態度と映ったのかも知れない。

だが、心に刻印されたものを内的な原理とすることによって理論構築を行うという手法はフィヒテに固有のものではない。アウグスティヌスに代表されるキリスト教神学の伝統では、優れた意味で心に刻印されたものは神の恩寵との関係で理解されるが、そのような賜物を原動力として自己の行動ないし生き方を決定していくことは、御言や神が示したしるしを「解釈すること」によって可能となるのであった。したがって、ニュッサのグレゴリオス以来、漸次的に自由意思と結びつけられることになる「選択」(proairesis)は、(神のおかげで)自分の力(になったもの)を源泉とし、それゆえ「新事態の父」と称されるとは言え、神意に背く可能性があることに恐れおののきながら行われるものでもあったのである。このような意味での「解釈すること」について、近代の文脈で「たんなる理性の限界内において」明らかにしたのがカントで、(この点ではフィヒテは不十分で)あることを示すことが本発表の中心となる課題である。

このことを明らかにするために、カントの触発の理論について、生理的受容モデルではなく、未規定のものを規定されたものへともたらす解釈モデルで理解することを提案したい。内的触発についても、自己自身による自己解釈によって自己を構成するという枠組みで理解されることになるだろう。これに伴い、「自己を超えたもの」ないし「外的なもの」とのかかわりを保存するために設定される、「受動性」という問題領域は、「解釈の責任を負うこと」というレッテルのもとで分析されることになる。「責任を負う」という主体のふるまいの核心はその主体が向き合っている「事実」を主体の意味づけのうちに解消できないということにあるのであり、このこと自体が「自己を超えたもの」ないし「外的なもの」という概念を要求し、そうした概念が示すものとのかかわりを自己の本質構造として組み込む

語り(カントの場合は超越論的観念論)を生み出すのである。

当然ながら、道徳的主体においても、「自己を超えたもの」ないし「外的なもの」という概念が示すものとのかかわりを自己の本質構造として組み込む語りは不可欠だ。このことを尊敬概念の解明によって示したい。